

完了報告書（平成 22 年度）

提出者 一宮 真佐子

提出年月日 2011 年 3 月 31 日

【プロジェクト名】

和文 農業・農村と女性表象の親和性に関する研究

英文 A Study on the affinity of women's representation for agriculture and rural space

【メンバー構成】

研究代表者 一宮真佐子

幹事

メンバー

【ねらいと目的】

近年、農村活性化の文脈の中で、女性の果たす役割が強調され、期待が高まっている。しかし、なぜそこで性別が取り上げられなくてはならないのか。農村における女性の地位向上は 1980 年代前半から政策課題としても上がっており、一般的な女性の社会進出、社会参画が推進される動向の一部だと考えるのが通常の解釈であろう。だが、政策で進められているから、と安易に解釈していいのだろうか。以下のような解釈もあり得るだろう。まず、農村女性に課せられる私的領域（家庭）での性別役割分業の社会的領域への拡大であるという解釈、次に危機的状況に際して、それまでは外部化されていたものが取り込まれるという解釈もありうるだろう。

さらに言えば、農業・農村の活性化言説の中での女性の称揚の背後には、家庭内で女性が食や育児を担うという性別役割のステレオタイプなイメージがあるのではないか。つまり、農業という職業、農村空間や農村コミュニティと「女性」のイメージが結び付けられているのではないか。

そこで、学術・政策面とポピュラーカルチャー（マンガ）における農村女性に関する言説を分析し、農業・農村と女性が、なぜ、そしてどのように結びつけられているのか、表象の親和性に関する考察を行う。

【活動の記録】

2010 年 6 月～

資料収集及び分析

2010 年 11 月 20 日

日本村落研究学会第 58 回大会にて口頭報告（一宮真佐子「農業・農村と女性表象の親和性」）

2011 年 1 月 20 日

GCOE コアプロジェクト「戦後日本におけるセクシュアリティと親密性の再編」第 6 回研究会にて、本プロジェクト成果の一部を含めた報告（一宮真佐子「マンガに描かれた農村におけるセクシュアリティとジェンダーの再構築／強化」）。

【成果の概要】

学術・政策上の言説において農業・農村と女性イメージに触れる先行研究には、以下のようなものがあった。

- ①フェミニストのC・v・ヴェールホフらは資本主義社会において農業・農村・農民と女性が「周的存在」として自然（天然資源）と同様搾取されてきたこと、その背後に「女性＝自然」というステレオタイプイメージの影響があることを指摘している。
- ②図像解釈学の若桑みどりは戦時日本の女性像について分析し、女性イメージの中でも「母性」の強調、それと繋がる「人的資源」と「天然資源」（農林水産業と鉱業）の増産という女性の役割、また危機的状況での周的存在の動員について論じている。
- ③農政において1980年代前半に「農村活性化」と「女性の地位向上」が政策課題となり、後半には活性化における女性の役割が強調されるようになった。その後の農村女性研究の中で、地域おこし活動の中での女性の「感性」の重要性や食品加工など、「女性らしさ」に関する言及が数多く見られる。
- ④渡辺めぐみは農村女性のステレオタイプと実態との乖離を実証したが、「女性向きの仕事」が、体力的な男女差や「機械が苦手」、「補助的」、「細かい」仕事など、ジェンダーイメージで語られることに言及している。

ポピュラーカルチャーについては、夢路行『あの山越えて』（秋田書店）を中心に近年のマンガ作品を取り上げ、その描写について分析した結果、以下三点の特徴が見出された。

- ①女性向きの労働というイメージとして「女の人のほうが辛抱強くこつこつやるから向いていると思うよ 男が勝てるのは力仕事くらいさ」という台詞や、酪農について「女にはつらい仕事」という台詞が見られる。
- ②食の生産の場面では、家庭内での食事の支度、直売所・出店などでの食品加工はほぼ女性、プロの料理は主に男性（まれに女性）が行っている。
- ③女性の「図太さ」というような表現で、農村環境への女性の適応力、柔軟性が描かれる。

以上を見ると、政策・学術面でもポピュラーカルチャーにおいても、「女性＝自然」というイメージから女性と農業・農村が馴染みやすく、「出産・育児」「食」など性別役割と農業生産を結びつけるというステレオタイプが形成されていると考えられるが、特にポピュラーカルチャーの中では、新しい女性イメージが提示されるとともに過去のステレオタイプの継続が見られる。ここで興味深いのは、従来のネガティブなステレオタイプイメージ、例えば「女性＝自然」のようなイメージが継承されつつも「男性（＝文化）」の劣位に置かれないというように、近年はポジティブに捉えられる傾向があることである。これは農業／工業、農村／都市、男性／女性といった二項対立構造がなくなったということではなく、むしろイメージとしては強化されつつ、その評価が変化したと捉えられるべきであろう。

【通信欄】

（研究代表者記入）

プロジェクト	<input type="checkbox"/> 次世代	<input checked="" type="checkbox"/> 次世代ユニット	<input type="checkbox"/> 男女共同参画に資する調査研究
経費	予算額	90（千円）	実績額 89,946円